

第2回 滋賀の地域円卓会議 結果概要

■日 時：平成26年3月19日（水） 13:30～17:00

■場 所：滋賀県平和祈念館 研修室

■出 席：

県：北田真規氏、西村勇哉氏、山口美知子氏、谷口郁美氏、船越英之氏、遠藤恵子氏

東近江市：野々村光子氏、朽木弘寿氏、河合喜久子氏、中西美千代氏、西村俊昭氏、

泉本了氏

（事務局：県民活動生活課 高尾、経営企画・協働推進室 沖野、

大津市自治協働課 木下、東近江市まちづくり協働課 浅田）

■欠 席：深尾昌峰氏

■ゲスト：矢島里佳氏

■内容

- ・オープニング
- ・プレ地域円卓会議 in 東近江
- ・第2回 滋賀の地域円卓会議

オープニング

- ・趣旨説明、スケジュール確認等

プレ地域円卓会議 in 東近江

山口氏：県からの提案で県の円卓会議の委員として参加している。第2回を東近江市でというのも決まっていた。第1回の会議で、実際に円卓会議をしたことがない中で、どうしていったらいいか議論するのはしんどいという話になった。せっかく東近江市で開催するのであれば、東近江のメンバーを中心にした円卓会議をプレで開催し、そのやり取りを皆さんと共有していく中で今後どんなことを考えていかないといけないのか、東近江の方と東近江外の方が一緒にテーブルに着くことで、どんなことが効果として見えてくるのかといったことを共有しながら次年度以降のことを考えていきたいという話になった。

今回、大変申し訳ないが、この会議がサンプルになる。今後、他地域や東近江で開催する円卓会議の参考にしていきたいと考えている。

県の事情もあるが、市でも、若者の就労支援についての関係課によるプロジェクト会

議を進めようとしていた。まずは庁内からということで関係課にお願いをしているところ。

ただ、行政が頑張るだけでできることではない、という共通認識がある中で、今回のテーマとして、個人的な思いの部分もあり恐縮だが、若者の就労支援を東近江の一番の課題として、プレの地域円卓会議のテーマとして提案をした。

東近江市の方は、私が選ばせていただき、今回お集まりいただいた。

外からの方は県からお願いをしていただいたメンバー。地域円卓会議を今後どうしていくかを一緒に検討していくメンバーを含んでいるので、アドバイザー的に後で参加をしていただきたいと思いますと考えている。

まずは東近江が今どういう状況になっているのか、特に若者の就労支援に関して共有してから、気楽な感じで進めていきたい。

県が呼びかけると固い感じになってしまうが、今回は試行的に開催するので、率直に質問していただいたり、こんなことができるのか、こんなことをできる人はいないかとか、ざっくばらんに意見交換したい。

今回は急きょ深尾先生が欠席されるということで、私が進行を務めさせていただきます。

山口氏：まずは自己紹介から。矢島さんからは活動のご紹介も含めて最後にお願いします。

佐子氏：NPO法人まちづくりネット東近江という中間支援組織として団体さんの活動支援をしている。

西村(俊)氏：(株)農楽の代表をしている。もともとは京都出身。Iターンで滋賀に来た。

今は甲賀市に住んでいるが愛東の方と一緒に活動している。東近江のことはかなり知っている。

野々村氏：就労支援をしている。最近、東近江市と喧嘩ばかりしている。障害者の就労支援が業務。国縣市町からは障害者手帳を持っている人で、働ける状態の人の支援を要請されている。実際は障害者という枠の人でない人で、応援が必要な人が沢山いるということについてお話しさせていただく。

泉本：障害者自立支援法が平成27年4月から改正される準備として、来年度、生活困窮者に対するモデル事業を実施する。障害をお持ちの方の就労がポイントとなるが、東近江市では弱い部分。仕事自体を作る必要がある。

河合氏：くらし相談支援グループということで、生活困窮者自立支援モデル事業の相談支援の担当。常勤は一人なので啓発もまだできていない。色々な課経由でお越しになる方の細々した相談に乗っている。

中西氏：商工労政課の担当する分野は東近江市の一番弱い部分と思っている。就労支援というお話を聞いているが、当課として取組ができていないかとすると全くできていない状態。まず若者のところからスポットを当て、市独自で就職面接会をしたいと思っている。まず東近江市にはこんな魅力的な企業があるとか、こんなに働きたい若者がいるということを知り、就労支援を拡げていきたい。

朽木氏：正直、東近江市の現状をつぶさに把握できている訳ではない。ニートやフリーターと呼ばれる方の就労支援をしている。現在、サポートステーションは滋賀県と大津市の2か所あり、東近江市は滋賀のサポートステーションの範疇となるが、草津に設置しているため湖南4市が中心となっている現状。ニートとよばれる働きづらさを抱えている若者が増えているという現状認識はしている。

矢島氏：普段は月の約半分を日本の各地域で、半分を東京で過ごしている。

0歳から6歳の子どものための伝統産業品を、日本全国の職人さん達と一緒に作っている。企画、開発、デザインなど全て自分達で考え、地域の職人さんに製作をお願いしている。私たちが欲しい物を作って頂いているので、作っていただいた商品に関しては、全て買い取らせていただき、和えるで販売を行っている。

私自身は、19歳の時に日本の各地域を回り、20～40代の若手の職人さんを取材したいと想い、自ら企画書を作りそのような仕事を探している時に、知り合いの方にご紹介いただき、JTBさんの会報誌で3年間連載させていただくお仕事をさせていただいた。それがきっかけで日本各地の職人さんにまずお話を伺って、どういう仕事や技術が各産地にあるのかを把握し、そこから誰のために、どのようにその技術を生かそうかという観点で地域を回ってきた。

産地を回っている中で、伝統産業がなぜ衰退しているのかということ、知らないということに尽きるということに気が付いた。私自身も産地を回り始める19歳まで、日本に生まれ、日本で育ったにもかかわらず自分の国どころか、地域の文化や産業のことをほとんど知らずに成長していた。自国の文化や産業を日本は義務教育課程の中で教えるということがプログラムに組み込まれていない。

私は東京で生まれ、千葉のベッドタウンで育ったため、祖父母とも暮らしていない。昔から伝わっているものの良さやそれに触れるという機会がないまま大人になった。そんな中でモノづくりをしていて、しかも各地域に行くと、その土地だから生まれた産業というものが今も残っていて、その土地にある意味というものが明確にある。他

の地域で同じものは作れない。

そういう魅力的な産業になかなか若い方が就労できない現実がある。なぜかという
と、マーケットが狭いし、ものが売れないし、こんなきつい仕事をさせたくない
と職人さんが技術を教えなかったりする。これらの色々な問題の原因はたった一言「人々
が知らない」ということから起きていると気が付いた。

今日産まれた赤ちゃん達が、日本の産業や文化を知る機会が日常の中にあれば、自
国の文化や産業に関して知るという機会が、多くの子どもたちに提供され、その中か
ら、興味を持つ子が生まれて来て、大人になって、何を買うか、何を選ぶかとなった
時に、ひとつの選択肢に地場産業で一生懸命作ったものが入っていく、そういう日本
にしたいと思い、そういうことをやっている会社を大学3年生の時に自分で探したが
みつからなかった。自分の考えた、子どもたちのために地域の技術を生かしたものづ
くりをする会社はみあたらなかった。

ないからといってあきらめられなかった、これがあつたら絶対にいいと思った。自
分がそういう風に子どもを育てたいと思ったし、私が思ったということは同世代の人
たちも何人かは同じことを思っている人がいるのではないかと思ひ、仕事になるの
ではと思った。

ちょっとしたアイデアや、なぜこういうものがないんだろうとか、色々と良くも
悪くも子どもは疑問を持つ、それを純粋にビジネスの手法を用いて解決ができないの
かということに取り組もうと、ビジネスコンテストに応募した。

2つ出して、一つ目は、日刊工業新聞主催のキャンパスベンチャーグランプリとい
う10年位続くコンテストで特別賞をいただき、賞金10万円をいただいた。しかし
会社の登記に25万円かかるので、起業できない。けれども、コンテストを通して専
門的な審査員の方や実際に起業している方からアイデアをいただいたので、さらに
ブラッシュアップした形で東京都が主催するビジネスコンテストで優勝し、その賞金
150万円をもとに和えるを起業した。そのことにより、自分で働く場を生み出し、
自分が本当に尊敬する職人さん達の仕事につなげていくことができるようになった。

そして、地域の地場産業がもう一度活性化することによって、生き活きと働いてい
る大人がいる職場には、若い人は入りたいと思うと思うし、ましてやこれだけグロー
バル化した現代社会において、どの国でも作れるものが沢山あり、少しでも安くと言
われる中で、あえて日本でしか作れない、その土地でしか作れない産業に従事できる
ことの誇りというようなものを、若い人が持ちながら働いて欲しい。

そのためには継続的な仕事を私たちが依頼し続けることが必要で、そのことにより
若い人が働きつづけることができる。その循環を生み出したい。

会社は3年目、1年目は準備だったので、2年目に入り、ちょっとずつ起動にのっ
てきた。地域とのかかわりという意味では、全国の色んな地域の地場産業の事例を知
る機会を得て、行政からも依頼をいただいて、例えば、今、弘前市でコーディネータ

一をやらせていただいている。弘前市にはたくさん産業があるが、その活かし方が課題だった。

どの方向にその技術を生かしたらいいのか模索されていて、それでお話しをいただき、一緒に考えていく中で『aeru 津軽塗のこぼしにくいコップ』をお仕事の中から出会った職人さんと共に作り、定番商品として販売している。地域の魅力を再発見し、子どもたちのために活かすのが私達の仕事である。

山口氏：せっかくなので、外側にお座りの方も自己紹介を。まずは北田さんから。

北田氏：高島市のNPO法人結びめで活動している。地域の、今値打ちのないものを見つけてきて、それに新しい価値を見つけてビジネスにしてくとということを専門にしている。4月から新しい事業を立ち上げる。

船越氏：産業支援プラザは、中小企業の支援をしているが、その中で新規創業の支援をしている。しが新事業応援ファンド助成金と言う地域応援ファンド事業もやっており、地域資源を使って新しい商品やサービスを作る人に助成金を出している。そのほかには国から創業補助金の事務局もやっている。また滋賀県内の4箇所でビジネスカフェを開催し、新しい挑戦者の発掘もしている。

谷口氏：社会福祉は、一人一人のくらしの幸せのため、一人ひとりを支援するということと、そういうまちを作っていくという両方の面から仕事をする。我々はどこにでも行けるパスポートを持っているようなものなので、足を運んでいく仕事だと思っている。

遠藤氏：名簿では淡海文化振興財団となっているが、愛称は淡海ネットワークセンターという。NPOや市民活動の中間支援をしている。NPOの設立相談やマネジメント支援、それに関連して組織の継続のための事業化支援が求められていると思っている。

浅田氏：色々な部署にまたがる課題を協働で解決できたら、と思いながら仕事をしている。本日のテーマの就労支援についても、来年度重点的に取り組みたいと考えている。

木下氏：普段は市民活動に関わるような仕事をしている。今日は皆さんのお話しを見える形にするお手伝いをさせていただく。

山口氏：ではまずは、私がなぜ若者の就労支援が東近江の課題だと考えているのかについて、皆さんと共有する必要があると思うので、野々村さんから現状も含めて20分

くらいで説明をお願いしたい。

野々村氏：10年後の彼を見つめた就労支援は、われわれが大事にしていること。来週働いていることよりも、10年後、この地域でポチポチ働いて、ポチポチ暮らしているということを実現しようとしている。

県内で7つあるうちの東近江の福祉圏域が担当で、東近江市、近江八幡市、竜王町、日野町2市2町で東近江圏域。応援センターは7圏域全てにある。

東近江圏域の大きな特徴は、東近江の利用者が東京の利用者を越えたということ。ちなみに、働き・暮らし応援センターは国の事業で、障害者就業・生活支援センターは県の事業、この二つの事業を行っている。

資料としてでている登録者数は703となっているが、実際は1,000を超えている。なぜかという、働き・暮らし応援センターの事業は、障害がはっきりしていて、働ける状態である方を対象としているので、この数字となる。

東近江の場合、1年間継続的な支援が必要なければ、ファイルを保留する。なので、この数字は入らない。

東近江は合計の相談件数が、大津の倍以上になっている。また、内容でいうと、就業と生活と両面の支援が多いのが東近江の一番大きな特徴。就労支援をする前に生活支援をする必要がある人、就労支援をしながら生活支援で伴走しなければいけない人が多いということ。これがこの地域の特徴。

障害別で身体、精神、その他と区分しているが、このその他は、障害者手帳を持たない機能障害を持つ人や手帳を持たない発達障害の人。知的障害で発達障害の人は精神に入る。

最近なら、京大出身者の利用者が沢山くる。この地域で一番多いのが引きこもり。あとは手帳がとれない難病。

入り口のところで、障害がわからず、相談機能を使ったこともない人がうちに来る。そこから障害を探って、障害者手帳を取って、障害者の枠で就労支援をするという人が多い。結果として手帳が取れない人が、その他になる。サポートする際の入り口はその他がほとんど。

地域の民生委員さんから、中学校の時から1回も出ていない人がいるという情報が入り、足を運んで、何とか関係を作って家から出す。明らかに知的障害の可能性があるとということなら、本人にその話をして、自分の状態を見てもらおうということで、県の知的障害を判定する部署まで行って、判定を受けて手帳を取るという作業を一からする。

軽度の身体で、手帳が取れることを知らない人もいる。

今、この地域で子供さんの発達障害は6人に1人。全国では10.5人に1人。

うちのセンターは、支援ワーカーが私を入れて5人で703人の支援をしているので、就労支援だけをするのもきついが、入り口の所でのサポートなど就労までの支援が大きなボリュームになる。本人さんだけの支援をすることはまずなく、本人さんの障害について家族に説明することも含めた家族支援も必要なので業務が大きくなるというのが現状。

東近江は平成18年から働き・暮らし応援センターがスタートした。障害のある人の今と昔の暮らしを比較すると、昔は行くところがないので、家で田んぼを手伝ったり、家にいたりした身体、知的障害の人が多。昔は人手が足りないので、企業で働いている人もいた。障害の重い人は入所施設にいた。

障害のはっきりしている人の今の暮らしということで言うと、基本的に福祉サービスというものがあるので、何にも引っかけられない知的の重度障害の人はいない。どこかで、保健師さんの検診などではっきりするので、養護学校に進むための相談を受けたりしている。なので、ほとんどの人が就職ということである作業所に行く。まれに自営業を手伝う人もいるが、昔と比べると作業所は大きい役割を占めている。

企業で働く人たちも、我々が頑張っていることもあり、少しだけ増えている。うちの関係で、継続就職しているのが年間40から50人。施設の関係や入院の数は変わっていない。

うちに相談にきた東近江圏域の入り口のところでよくわからない人の平均引きこもり年数は25年。ここ2、3年で、5年から8年くらい家から出ていないという人の相談が急速に増えている。

昔は、よくわからない人も、知的のボーダーの人も、どこかで働いていた。なぜかという企業の中に役割が沢山あったので、どこかで働く場所を選び見つけられる社会であった。障害がある人に回りが合わす必要はなく、仕事を選べる状態であった。でも今はオートメーション化されてきて、あえて働きにくい人を働かせるという隙間がなくなった。社会でうまくいかない人が自宅にいるという数が、企業にいる人を逆転した。

また、入院が増えてきた。私はここが一番怖いところだと思っている。

昔、精神病院は精神障害の人が入っていた。滋賀と大阪に多いが、今、精神的に不安定過ぎて閉鎖病棟に入って出てこられない人たちは、精神障害ではなく、発達障害の人。発達障害がはっきりわからずに、自分は世間と何か違うなと思いつつやっ

きて、企業で失敗して、自宅にいて、精神的にコントロールできなくなるが、ベースが精神障害ではないので薬では治らない。病院も原因がわからず満杯になっている。その子達は親がいなくなると生活保護を受けることになる。病院での生活保護は大きな金額になるため、多額の税金が投入されることは明白。

ではなぜこのようなことになるのかと考えると、結局自分の状態を、自分のことを知る機会がなかったことが全てだと思う。

就職までの支援は面談の上で紹介するが、それだけでこの人たちの状態はわからない。25年間引きこもっていた人に、なんとか出てきてもらっても、製造業で働けるかというとなんか働けない。障害が何かわからないので、福祉サービスも使えない。なんとか引き上げて乗せてあげるステージがないので、また落とさないといけない。

なので、中途半端な輝ける場所として、ナラ枯れの木を薪ストーブで、エネルギーとして使うため、ひたすら薪を割る作業をやらせてもらっている。1次産業の凄いところは、製造業で失敗した人でも失敗がないこと。薪はどうせ燃やすから形は残らない。これが一番。

もう一つが、わかりやすいこと。エアコンの部品を袋詰めしていても、作業をしていると彼らは言うが、薪割り仕事だという。なぜかという、地域の中のエネルギーを作っているという循環の中に自分があるイメージができる。3人チームの中で役割ができる。割ったものをお客さんが買いにくる。それが生活の中のエネルギーに変わっていく。その循環の中に自分たちがいることは、彼らには大きな力になる。

うちの凄いところは、薪の仕事をした彼らが一回就職してから継続するようになった。一般のハローワークの定着率は40%を切る。うちは75%を超える。

薪割りの仕事で何の力を付けるかという、就職する力を付けるのではなく、生きていく力をつける。

エンジンの皮むきの作業は、東近江市のフードシステム課から連絡いただいて、JA繋がり、エンジン農家さんが機械で剥くと傷が付くからといって手作業で剥いてくれる人なんていない、ということで紹介をもらった。ひたすら剥く。そうすると皆がだんだん薪割りとエンジンの皮むき作業を選ぶようになる。薪割りの方が金になるということをちゃんとわかっているというのと、エンジンは女の人でも剥けるということで、選ぶ。ここで選ぶという力が付く。今までは与えられることだけだったが、作業を選ぶということが凄いこと。

最後に一人の男性を紹介する。この方は48歳。41歳のときに出会ったアスペス

ガーの人。強烈な発達障害の人。

言葉通りにしかわからない。こう思っているだろうとか読めない。昔から頭しか良くないアカン子やと言われてきた。

某有名大学を出てから自営業のお茶屋を手伝ったが、お父さんが亡くなってお茶屋さんは倒産した。その後、お母さんも亡くなって、残った財産で生活していた。

生きて行けなくなると、親戚がいる滋賀に来た。親戚の人が民生委員さんと繋がって、民生委員さんから話があって、出会った。

写真が趣味だが、どれだけ頑張っても、同じ構図でしか写真が撮れない。

発達障害の人の特徴として、説明のしかたで理解できるかどうかの違いが出る。彼に工場で何がしんどかったかと聞くと、同じ日本人なのに宇宙人が一杯いるみたいだったと答えた。例えば、この機械の話をしている時に、あそこの部品の話をして、この機械に付いている部品とあそこの部品は別のもので、この話をしているのに、なぜ向こうの話をするのか、わからないとなる。

薪割りをしてもらった時に、本人を変えるのではなくて、まず周りの人が本人にわかりやすい伝え方を探るという目的で入ってもらった。

薪割りは普通、置いてあるものを全部割ると思う。割り方を教えてもらおうと、次の薪も同じように割る。でも本人の中では、この木と次の木は別ものなので、1個割って、次お願いというと、何をふざけているのか、次の木はどうやって割るんですか？ということになる。だから、ここにある木を全て同じように割ってくださいと言うと分かる。バンバン割る。

彼は自分の説明書を自分で作れるようになった。

彼は自分が発達障害だと分かった時に、良かったあ、アスペルガー障害で良かったと言った。なぜかと聞くと、自分がアカン訳ではないと知れて良かったと言った。

彼は今就職して3年。八日市のオートセンター村田で働いている。

今は自治会長。自治会で自分の説明書を配った。副会長は5人。回覧はこういうものにしてもらわないと自分はわからないと説明できる。自分のことを知ると納税者になれる。そのためには自分のことを知れるステージが必要だと思っている。

作業所もどれだけ頑張っても年一人二人は卒業できない人が出るが、薪屋からは26人が卒業している。薪屋を卒業した人で辞めた人はゼロ。

就労支援というよりも、自分の力で納税者になって生きていくという仕組みが、地域の中にあることがとても大事。

山口氏：通常は障害系の部署の話で終わりがち。

私自身も仕事を紹介する時に、彼らを安い労働力と思うには抵抗があったが、それ

はある意味、逆差別だという言葉が野々村さんから返って来た。なので、私の中でそのような概念を一旦横に置いて、人手が足りないという話をとにかく野々村さんに投げて、コーディネートしてもらった。それにより、ワーカーさんは凄く大変な思いをしてもらっているが、それが彼らの卒業につながるなら、とにかく伝えようと思った。

そして、その時に、これは福祉の仕事ではないと思った。薪を割ってくれている事業者さんは福祉には全くの無縁。基礎知識もなく、発達障害って何？というところから、という状況。

野々村氏：薪屋の社長は、本人に「あんたは何の障害や？」って聞く。

山口氏：それ位、素人。それが逆に色々な効果を生んでくれているというのが分かった。そうすると、もっと地域にそのような場所が作れるのではないかと思った。

そして、そういう場所があることが、地域の困りごとの解決につながると思った。

なので、今回も障害に関係ない方たちの方が多いが、その分、分からないことも多いと思うので、今日ここになぜ西村さんがいるのかも含め、これから取り組まれることをご紹介いただきたい。

西村（俊）氏：今まで中間支援はやったことがない。元々は、切った後の木を流通させるため、実際にコストがどれだけかかるかを計って、採算が合うようにするにはどうするのかを考えて欲しいということであった。

調べると（採算は）合わない。合うにはどうしたらいいかと考えた時に、スキルが必要なことではないので、コストを下げるため、市民と協働でするとか、就労支援の場として使ってもらおうということから始めた。

始めた二人は、「こんな効果があったのか」という感想。

第2弾は、薪ストーブに火をつけるための着火材。市販の着火剤はジェル状の毒々しいもの。もっとエコで人に優しいもので作っていけないかということで、菜の花館では米の籾殻で肥料を作っているが、若干、灰のようなものが出て農地に撒かれて捨てられる。これをタダで譲ってもらい、これと、結婚式でちょっと使って破棄されるロウソクで着火材を作ることにした。これが結構ニーズがあって、売れそうだったので、薪割りをしている人と一緒に作ろうということになった。

これで、いくらかでも雇用が生まれたらなと考えている。

僕は、元々は都市部に住んでいて農村地域に来て、今まで農村地域でコメ作をしていた。農村地域は、暮らしやすいし、コミュニティがあって、自然もあって、暮らせる。

子供も障害を持っていることもあり、都市の会社を辞めてIターンで来た。やり始めたことは農村地域にある資源を使って、農村の仕事を作ること。

農村地域に人が住まなくなっていくのは、若者の働く場所がないから。しかも、農村地域で工場などの都市化した働く場を作ってしまう。それでは、参勤交代するだけで、全然コミュニティができない。

それよりは、もっと個人企業や小さな仕事を沢山作ってコミュニティを作っていこうと思っている。

もう少し、農村地域に小さい企業が来ればこういったことができる。薪の社長さんなどは個人事業主さん。ぼくもそう。大きな会社ではできない。

小さな企業家さん、つまりスキルのあるプロボランティアを集めて、一緒に新しい地域の人に優しくて地域の資源を使った仕事の可能性が見えてきたなと思っている。

山口氏：地域の中で始まりつつあるが、生活困窮者支援の動きが市役所でも起こりつつある。障害者という枠ではない違うサービスが始まろうとしているところなので、市役所で考えていることなどをお話しいただきたい。

泉本氏：生活困窮者支援が始まるということで色々と分析や調査をしていると、貧困のリスクが高いのは高校中退、不登校、引きこもり、自分の居場所なし、というのが調査の中で出てきた。東近江市のことを振り返ると、高校中退の方の支援は、義務教育を終わっていると市役所ではできない。少年センターでは把握などしているがフォローはできていない。サポートステーションにも、なかなかそこまで行けないし、ハローワークにも行けないという方が沢山いるということが分かってきた。うちの立場は貧困への予防という視点から若者サポートをしていかないといけないと思っている。来年度以降はそこを重点的に取り組みたい。

河合氏：実際の相談支援を10月からさせていただいている。平均25年の引きこもりという話もあったが、一番深刻なのは50歳台の息子と80歳、90歳の親というケース。高齢の方の年金で生活しているが自分が死んだらどうなるのだろうかとなる。もっと早く相談に来てもらえていたらと思う。

派遣の仕事で東近江に来たが、雇い主との契約がうまくできておらず、支払いが受けられていなかったり、会社の駐車場の料金を請求されたり、保険に入っていないケースがあったりする。そのようなトラブルによりお金がなくなって、明日のコメもない、ミルクもないとなるのがパターンとしてある。

引きこもって間もない高校を中退した方で、みんな大学行ったり、就職したりして

いるのに全然働きにも行けずという方もいる。色々な方が相談に来てくださっている。

生活の支援など相談には乗るが、就職とか職業の支援でハローワークにも行く。この間も20回も失敗したという方もいた。仕事に行っても周りの人が自分をいじめているように感じたり、体調が悪くて1日休んだら連絡もできなくなってしまったりする。就労の支援に関して、私にはスキルがないので、色々な所とつながっていききたい。

やはり貧困の連鎖を断ち切りたい。困窮家庭の中学生が進級できるような学習支援も社会福祉協議会と一緒にさせていただいている。小学校でのいじめで、人と会えなくなってしまった外国籍の方への支援もさせていただいている。

参加してくれている大学生のボランティアの中にも課題を抱えている人がいる。中学生と大学生が助け合いながらお互いに地域のために役立って行って欲しいなと感じている、というのがこの6ヶ月の感想。

山口氏：実感としては増えているのか。

河合氏：生活保護の相談は年々増えている。ただ、相談に来られても7割が受給に至っていない。最近では20歳代30歳代の若い方が増えている。働けそうなので、就職を探してくださいという話になるが、探せなくて、繰り返し相談に来られることもある。

山口氏：地域では、若い人がいなくて困っているという声の方が多い。東近江市で支援が必要な方が1,000人ということなら、生産人口に占める割合としてはそれなりに大きい。断然、出口が少なすぎる。

この話を聞いていて、矢島さんはどのように思われたか。

矢島氏：商品を作る過程で、ある一定の、繰り返す作業などをお願いすることがある。最近、職人的な仕事は、何かしら障害を抱えている方の方が上手なのではないかと考えている。

構想段階ではあるが、施設の職員の方は、この子はこれができる、というものを把握している。職人さんの仕事と合えばできる。仕事が続かないことと障害の有無は関係ない。障害がなくても辞める人は辞める。ぴったり合う仕事であれば、障害がある方の方が継続できるという仕事もあるのではないかと思う。

普通に、健康診断的に自分のことを知れる場所があったら、自分との付き合い方が分かるようになる。その他で相談に来ることが減ればそれは凄くいいこと。

特性を知る機会や関係性が当たり前のように作られていけば、昔の働き方に戻れるのではないか、昔の働き方の応用ができるのではないかと考えている。

山口氏：そのような状況を、東近江だけが分からず過ごしてしまっているのか。

野々村氏：地域性はある。大津は、生活の相談を先にする。それに対して、特に東近江は、中途半端な田舎というのがネック。生活できないという相談は格好悪くてできない。働きたいという相談ならできる。地域の一番の特徴と思う。

日野町や竜王町も同じ傾向。隣の家の方が福祉課にいるから絶対に相談に行けないということになる。

薪のステージがあって、一番いいのは、「働かへんか？」と誘って出てくる引きこもりの人はいないのに対して、「まちが過疎化していて、働き手がいいひんから困ってる。できる人探してんねん。助けてくれへんか。」と言うと来てくれる。仕事という切り口から、本人の暮らしに変えることができるところ。

働くという切り口なので、親も了解する。手伝いに来てもらうという名目がある。

この間も、小学校4年生から42歳まで一回も家から出たことのない人が薪屋で働いて、10か月就労した。それも最初に、親戚のおじさんを登場させて、センターで何回も「おじさん困ってんねん。」を練習させた。手伝いやったらいいけど、ということでも薪屋に来た。

はじめは週1回でもしんどかったが、少しずつ増やして行った。本人は、働いたらお金がもらえるということを知った。一番良かったのは、テレビで見ていた「吉野家」に行けたこと、と本人が言っていた。本人にとって、大人は親しか知らなかったが、気づいたら自分も大人になっていた、と薪屋で知った。

履歴書には、引きこもっていたことも全部書かせる。「小学校不登校。引きこもりのため」と。何月から10か月間、薪屋など。

彼の場合、サポートは必要だが、障害がないので障害者雇用にもならず、助成金も使えず、雇用しても会社にメリットがない。でも我々が開拓した会社の社長が、本人に「約30年引きこもって、十分充電したから、うちの会社で放電しなさい」と言ってくれた。彼は今100円均一のビンを作っている会社で働いている。そこで良かったことは、本人が週5日は無理ですと言えたこと。薪屋で、週2日でしんどかったから、週5日は無理だと本人が知っていた。なので、社長に週3日のアルバイトからお願いしますといった。週5日の正社員の道があったが断った。ここが納税者になって行く力。

週5日行っていたら、失敗して、また引きこもっていたと思う。薪屋がある意味がここにある。

本人達は、生活保護の相談に行っても対象にならなかった、というところで終了してしまっている。そこで、ハローワークに行きなさいではなく、日払いで時給500円でも、薪屋に行ったら手伝って欲しいと伝えてもらえると、そこに繋いでもらえると、

うちのセンターのある意味が分かってもらえる。

ハローワークには何回も行く。でも就労できずに5年ほど経って、生活保護の相談に行く。でも断られ、ハローワークにといわれる。で、また5年ほど経つということになる。これがパターン。

個人的には、相談とか面談は必要ないと思う。確実に納税者になれるステージがいる。そうでないと市が潰れる。

地域の困りごとがステージになることが本人達にとって一番いい。地域の循環の中で自分の居場所があることが大事。

就労支援システムということで、行政と作業所とうちとハローワークで「YOSINET」というのを始めた。そこでやっているのは行政ができる就業支援。

作業所で十分できている人の次のステージとして、行政の現場で、実習で働かせる。

例えば、住民アンケート調査の封を開けて仕分するという作業や、竜王町では公用車の洗車を障害者の実習でもらったりした。

したことの無いことをするだけで、作業所では一番だったが、自分は知らないことは全然できないということに気付く。行政ができる就労支援もある。

働きたいというところまできても、一般の企業では働けない、手帳も取れないという人がどんどん溜まっている状況なので、次のステージは必要。

例えば、図書館のグリーン管理をすると家族が遠くで見ている。それが大事。うちの子が草刈りをしていたということで、家族の中で、引きこもりが労働者になる。この子は凄いと。

中途半端な場所が、沢山欲しい。

西村（俊）氏：作業所もこれから満杯になる。

1次産業は、それなりの仕事のたまり場。それなりに収益がでる仕事に仕立て上げるには、小さな企業をコーディネートする人がいる。手伝ってくれる人はいるが、段取りする人が圧倒的に少ない。簡単に言うと、声掛けする人が足りない。

野々村氏：作業所も今は一杯なので、今後の流れは想像できる。行政は障害者雇用の率を2.0%から倍以上に上げて解決しようとする。

でも、そこで雇われるのは知的や精神障害の人ではない。心臓ペースメーカーの人などの普通の支援が必要ない人に限定するなど、身体にシフトする。

もしくは自分で出勤できる車椅子の方。

どんどん、発達障害、知的、精神障害の人は厳しくなり、手帳を持たない人で作業所は一杯になる。今、養護学校に子どもが通っている親は中学校の段階から、作業所

に媚を売るようになっている。それ位一杯の状態。

国はそこにお金を出して、作業所に対して就職させなさいと言う。でも障害の重い人のために作業所は絶対に必要で、そこで頑張る人たちのステージはある。

そうすると、障害の軽い人は余計に居場所がなくなる。養護学校卒業生は、ほとんどの人が作業所などへの就職が決まっているが、一般高校卒業生で決まっていない人は多い。

一般高校を出て、大学に行けなかった子で、発達障害と思われる子がいるという問い合わせが高校の進路担当の先生から入る。パンフレットを渡してもよいかと聞かれる。大体はそのまま卒業してアルバイトでもすれば、となるようだが1年くらい経つと相談がくる。

朽木氏：我々は就労支援をしている。表向きはニート・フリーターなどの働ける方の支援。私も初めはそう思ってこの事業を始め、3年経った。初日3人ほど来られた方の対応をして思ったのは、2人は明らかに発達障害。

先ほど本人が自分の状態を知ることが大切という話があったが、それを受け入れずに過ごしてきた方がうちに来られる。10人のうち、3人から4人が発達障害や知的障害をお持ちである。だからといって、25歳や30歳まで過ごした方に発達障害だから支援を受けてくださいといっても簡単な支援では終わらないというケースが非常に多くなっている。

働き・暮らし応援センターにつなげるのは、家族が、ある程度周りの人を引っ張ってこられる湖北や高島などの地域。

逆に、地域のネットワークが乏しい湖南や大津の地域では、本人が働きたいけど働けない、自分は障害者ではないという前提だから、サポステに行こうとなる。IQを測って見たら65。70を切っている知的障害だと、今まで認識がないまま生きてこられた方だったりするというのが現状。

残りの半分の方も、色々な課題があるが、恐らく障害があるのでは、といった方がうちに来られる。

我々も働く場、賃金を提供できるような場ではないので、週に2日マンションの清掃管理などを一緒にやりながら、働く場をまず体験してもらおう。なぜ働く場を体験してもらおうかと言うと、99%は社会への参加の率が低いことが原因だから。

サポステでも、牛丼屋に行ったことがない人は、少なくない。居酒屋に行ったことがないなど、そういう経験が少ないから頼りにされることもない。

サポステに来て、記入する用紙の書き方が分からない。

10人のうち3、4人は知的障害があるから、人に話し掛けない。ハローワークに

行っても、用紙が書けないからサポステに行きなさいと言われ、うちに来られる。

始まるのは、障害の認知から。働き・暮らし応援センターにつなぐケースが多くなる。

年間に600から700件くらいの相談件数があり、就職は200件くらいある。残りの半分くらいは、まず自分のことを知ってもらうところから。

最高齢は80歳超のおばあちゃん。孫の相談かなと思ったら、50歳代の方の引きこもりの相談だった。本人は働いたこともない、障害があっても我々は何もできないので、他の機関を紹介することになる。

働くということを知らないまま、人生が終わってしまうのか、という方が相談にこれらることもある。

野々村氏：時々、働いている人と回転寿司や居酒屋に行く。理由は、働くということは人生の一部だと知ってもらうため。マクドナルドに行くと、大体わかる。トレーを返すことを頼むと注文する列に並ぶ。回転寿司では手は出さず、待っている。

精神障害の人で入院の長い人は、トイレのマークがわからない。前は字で書いてあったが、今は絵になっている。トイレの前で止まって、こっちを見る。

働いていない人は、生活障害。暮らしずらさ障害。

河合氏：30年前とは検診で障害が見つかる率が違う。10か月くらいで気付いて、親に説明しても、今だけ遅れているだけと思ってそのまま行ってしまう。義務教育の間は、そこそこ通えば卒業できるし、高校も酷くなければ卒業できる。気付くのは就職してから。

野々村氏：日野町で、小学校5、6年生の保護者向けに話した。今、障害があるか無いかということが大事なのではなくて、将来のために、いかに応援団を作っておくかが大事と話した。パンフレットを渡すと、終わった後、多くの問い合わせがあった。3歳児検診でひっかかったが、今先生に言った方がいいかと。言ってはいけない事だと思っていたと。私は、言いなさいという。そこが行政の役割の所。今遅れていることが云々ではなくて、つまりいた時に、応援団が近くにいた方がこの子が生きやすいというのを伝えることが大事。

県が、引きこもり支援センターと高次脳機能障害センターと発達障害センターの3つのセンターを作ったが、あそこまで来られたら引きこもりと違う。

あの3つの機能は県の機能ではなく、地域の機能にしないといけない。

引きこもりは県の保健所が担当していて、市町は関係ないが、本当は地域に窓口が

いる。

発達支援センターは、東近江にはあるが子供が中心。やはり、市町の福祉と言われる窓口を引きこもりの窓口がいる。

親が、福祉じゃないから、どこにいったら良いかわからないまま15年が経ったりする。恥ずかしくて言えず、言おうと思ってから15年。まだまだ、保健所は犬を連れて行くところという認識がある。

市役所の福祉は障害者対象。どこに窓口があるのかわからないという状態。

窓口がはっきりすることが大事。中途半端な人にとって、わかりやすい窓口と出口が地域にあるべき。生活に困窮していないと親が思ってしまうから相談に至らないし、本人のタイミングに合わせてつなげられる支援者側のアイテムが必要。

薪屋は愛東で実施しているので、そこまで来られる人でないとできない。着火材は、バスで来られるところでやる。薪屋みたいところがもっと欲しい。

西村（俊）氏：農業や野菜作りは出荷などに人手が必要で、地域の中で高齢者を使って処理しようとしている。お金も稼げないし、何にもならないと思えるが、そういった作業がこのような子達の就労支援に繋がるという発想に変える必要がある。

そんな中で、自分たちのスキルで何かできないかと考えてやっているが、それが楽しい。

このような作業を通じて、彼らが地域の労働力になってくれて、親が安心して死んでいけるようになればいいし、税金の負担も減る。我々の活動を知ってもらって、自分達でもできると思ってもらいたい。皆でそういう若くて就職しない子らが農村地域で働ける、コーディネートできる若い子達と楽しくやろうよというような宣伝をして、地域に若い子が帰ってくるような所にしたい。

野々村氏：その発信は行政にやって欲しい。行政は情報を持っている。そのアイテムの情報がほしい。

山口氏：相談窓口などに紹介できるアイテムの情報があれば繋げられる。その一方で相談のない部署は、相談窓口に情報を提供できると繋げられる。

泉本氏：ネットワークができていない。就労と言ってもなかなか繋がりが出来ていないので、これからプロジェクトチームを作って繋げていく。

野々村氏：市役所の課には情報が沢山ある。祭りの実行委員会や有償ボランティア情報など、実際にやってみる体験の場所の情報を行政からもらえるとありがたい。

朽木氏：全県でやっているのと、木ノ本から草津にくる。

そういう人は情熱も持っているのでちゃんと就職できる。でもやっぱり、近くでないですかと聞かれる。職場体験はなんとか準備できても、毎日作業できる場が作れるとできない。

野々村氏：県の知的障害の方のワークステーションも大津までいかなければならない。

朽木氏：大津の方には好評。

野々村氏：大津という地域はそれでいい。でも東近江には無い。行政実習の開封作業でもいつも一杯で、全然足りない。福祉ではない場所での実習をどんどんやって欲しい。まだ福祉という枠の中での話になっているので、行政の仕事の体験実習として、用意されたものではないものになっていくというのが一つの課題。さらに、地域の中の困りごとの解決のステージになると一番いい。

山口氏：薪の事業は、厚生労働省以外の省庁が注目をしてくれている。視察も多い。皆さん、なるほどと言って帰っていかれる。

現場のレベルでいうと行政の縦割りはなくなってきているが、市役所の部署間ではまだまだ。野々村さんのところまでつなぐ、そこから西村さんのところの仕事のところまでつなぐためには、かなりの情報共有が必要で、油断をすると隙間にすぐ落ちてしまう。

佐子氏：雇用を生む仕事をしていたこともあった。辞めた方がいて、その親が来て、実はアスペルガーだったと聞いた。本人は、毎日来たいという。やはり知ることは大事。

そのアスペルガーの人は、細かい作業はよくできる、学歴もよい、計算もできるから一定の期待をする。どんどんやらせようとするが処理できなくなる。それが事前にわかっていたら企業側も活用の方法が考えられたかもしれない。

このような取組は、企業のブランディングなどと同じで、何か1個だけ進めてもうまくいかない。我々も中間支援なので、自分にも課題があるなと思った。

中西氏：地元に戻って来てもらいたいとか、地元で魅力的な企業があることを知ってもらいたいという思いがある。その前に、自分たちが地元でどういう企業があるのかを知らないといけないと思っている。いちおしフォーラムというイベントで、障害者雇用をしている企業のお話を聞かせてもらった。どのような経緯で、どこでつながったのか、知りたかった。何かツテがあったのか気になっていた。

野々村氏：平成18年にスタートした時には、障害者雇用している企業は、東近江は極

端に少なかった。そんな中、一人で64社回ったが、雇用してくれる企業はゼロ。見学だけさせて欲しいということだったら64社ともOKだった。そこからだった。今でも、雇用して欲しいと企業に行くことはなく、見学させて欲しい、実習させて欲しいとお願いに行く。実習させてもらい、良かったら雇用につながることもある。常に実習をさせてもらえる企業をいかに多くもつかが大事。今、うちのことを知っている企業は500社。雇用しているか、していないかは関係なく。

今でも、とにかく行く。募集と書いてあったら行く。名詞は壁に張る。渡さない。ツテはない。オートセンター村田も、チラシ求人に入っていたので行った。言っている意味がわからないと言う話だったので、本人を連れて行った。常に、その繰り返し。

一回会社と関わったら、10年付き合おうと約束してくれる。見学も、今は忙しいといわれても、いつなら行けるかと食い下がる。

うちは福祉には嫌われているが、企業とのつながりは多い。ちょっと変わっていると思う。

中西氏：雇用してくれている企業の方は、支援ワーカーさんにお世話になっていると皆さん話される。

野々村氏：企業の方は、最初は、何しにきたの？というところからのスタート。

古い地域だと、歩けない人を連れてくるのか、精神病の人を連れてくるのかという感覚が普通。知らないから仕方ない。

でも、もうちょっと教えたらか、となってくる。

企業の方がお世話になっていきますと言ってくれる、うちはお世話しているという。ちゃんとした、やめない働く人を紹介して、その会社は潤っている。上から目線で接している。

朽木氏：それは東近江だけ。

野々村氏：そうすると、企業の間で自然とネットワークが出来てきている。最近、センターがどんな障害者を紹介してきているかの話し合いをしている。それが新しいステージ。情報交換をして企業も色々考える。

障害はないが生きづらさを抱えている人が、納税者になれるということを、知っている人の中で、まず当たり前にする必要がある。

我々は、店に入ったらただではでない。

山口氏：東近江のセンターの中で、野々村氏さん以外は、もともとワーカー以外の方。働くのが当たり前、地域に働く場があることを知っている方がワーカーをしてくれて

いるのが強み。東近江には、幸いなことに、このようなセンターがある。

野々村氏：これからは企業とのネットワークだけでなく仕組みを作りたい。行政と一緒に仕組みを作ると行政にもメリットがある。

山口氏：そのようなことを検討する場を今後作っていきたいが、異論はないか。

野々村氏：中途半端な人を福祉課に連れて行っても対象じゃない言う話で終わる。福祉の対象にならないなら、対象になる隙間のない、平べったいステージを作る必要がある。

朽木氏：その隙間は広い。

矢島氏：野々村さんに就かないと分からないので、弟子をとったらどうか。

野々村氏：私にというよりも、センターに行政の人が実習にくる。

矢島氏：外から見ていると、一見するだけでは、その言動の本当の意味はわからない。今この場にいる人は分かる。

私の仕事も多種多様だが、一見しただけではその意味が分からないこともあるかもしれない。だからこそ、新入社員には、私の仕事が会社にどのように影響しているのか考えてもらっている。

野々村さんの凄さや言動の意味合いはレポートを書いたりしただけではわからない。野々村さん個人に頼りすぎているのではないだろうか。

野々村氏：5名のワーカーが同じスタンスで仕事をしている。今日も着火材の場所づくりを引きこもりの子達と一緒にやっている。そろそろ倒れても大丈夫。私の次の役割はセンター以外の所に行くこと。

矢島氏：市の人も、その働き方の意味を学びにいかなければならない。学びに行くことで、はじめて自分達は何をしなればいけないかの本質が見えてくる。

西村（俊）氏：縦割りになっている。自分の担当から離れることは、できませんと言ってしまう。結局たらい回しになってしまう。そういう隙間が一杯ある。そこが問題。

矢島氏：知らないから、たらい回しにするしかないのだと思う。たらい回しにする人にまず知ってもらうことが大事だし、一人の人を救うことができたなら、たらい回しにすることよりも、何か自分で考えて、聞くことが自分の仕事を楽しく意味のある仕事に変えることができるということに市の職員が気づくことが大事だと思う。

西村（俊）氏：市民にとっては、市の職員は市の職員。なんとか課の職員ではない。なんとか課の職員に伝えておきます、ではだめ。

矢島氏：職員の方は、誰のために働いているのかを思い出して欲しい。そこから全てが始まる。

河合氏：生活保護を受けておられる方も、引きこもりの方も、納税者になりたいと思っている。何とかしたいと思っている。それは真実だと思う。

野々村氏：格好良く生きていこう、今、格好悪いぞ、と言う。薪に来た時に聞かれる、格好良くなったかな、と。まだだけれど、もうちょっとしたら良くなると答える。42歳で小学校の時から引きこもっている人は、働き出してから聞いて来なくなった。なぜ聞かないのかと聞くと、働くので精一杯で格好良いとかどうでもいいという答えが返ってきた。その時は、格好いいと言った。

でも、働きたいと言うだけの人もいる。働くという意味がわからないけれど、働きたいと言っていたらなんとか上手く行って来た、なんとか許されてきたという人がいる。

そんな人に、働くとはどういうことか、本当に働けるかを知ってもらう場も、やっぱり薪割り。働くことが何に繋がるのか、知るのが中途半端なステージ。

矢島氏：親の働く姿を見る機会が少ないからこそ。働くことが何を生み出すのか考える機会を小学校の時などに作るということが必要だと思う。

河合氏：生活保護世帯の3割から4割がまた生活保護を受けるというのは、親の働く姿を見ていないから、実際に働いてお金を稼ぐということが分からないから。

山口氏：今回のテーマは、個人的には大変良かったと感じている。市としても、次年度の取り組みに直結している。

課題があるのは確かだが、こんなセンターがあるのはラッキーだ、と思える市役所になれば、うまく仕組みが出来ていくのではないかと思うし、そういう仕組みにしていけないといけないと思っている。

第2回 滋賀の地域円卓会議

全体イメージについて、事務局としての考え方を提示。

西村（勇）氏：第2部の進行をさせていただく。まずは、地域の課題を掘り起こすということと、プラットフォームを構築するという2つの目標が掲げられているので、その観点から前半を外側から見ていただいで感想をお願いします。

北田氏：非常に面白かった。ざっくりと、どうすべきか、どうしていききたいのかの全体

が見えた。今回のような事例を、違う地域にも一つの成功事例として持ち回れるのはよいと思う。地域で仕事を作っていないといけないという事に関しては、我々もアイデアを出していける。今日のような形が良いと思うが、ただ、終わった時点で我々が思ったこと、考えたこと、アドバイスできるなと思ったことを、どういう形でキックバックするかが問題。単発で聞くのは誰でも聞けるが、その先が大事で、どのように長くお付き合いしていくのが課題と感じた。

船越氏：お話をうかがって、あまり関わりのない分野であるが、いかに地域に働く場を作っていくのか、経営者の方へのサポートを通じて地域をサポートしているという意味では関わりはあるのかなと感じた。

ただ、直面する課題と我々がソースとして持っている仕組みや企業をどうつなげていくのかということには、まだまだ課題がある。

市役所に情報があるのに提供してもらえないという話があったが、そのセクションの人には情報の価値がわからないのだと思う。ある人には価値の高い情報も、価値がわからない人にとっては、どうしたらいいのかわからない。それが情報の難しい所で、そのままでは仕組みにしてもあまり回らない。人と人との繋がりでの解決方法の糸口を作ることができればいいと思う。

谷口氏：本日の内容は、日頃から関わりのある分野。学びたいことも沢山あるし、広げて行きたい。円卓会議が成功するには、共通の強い目的が必要である。市役所の方の場合、異動があった時に私は来て1年目ですというようなことを表明してしまうと、当事者性がなくなる。今日の良かった所は、そういったことを言わずに役割を考えていたこと。課題の投げ込み役である野々村さんが、山口さんを信頼されているから裏も表も出せた。そういった場だったことが次に繋がる。

県域でやる場合は、漠然として議論が深まらない。課題も投げ込みにくい。地域版の良さを感じた。

場のしつらえとして、少し近すぎた気がする。今回のメンバーは話せるメンバーだったが、少し異様な距離感だった。もう少し離れている方が話易いと感じた。

遠藤氏：今回お集まりのみなさんは、個別には知り合いなのか。

山口氏：個別には知り合いという方が多かった。

遠藤氏：出口の部分の話に関して、初めて聞いたという方が多かったのかなと感じた。

一同に会する、地域の課題を改めて課題として認識するための場としては良かった。アイテムがたくさん欲しいという話があったが、仕組みを作って情報を流すだけでは通り過ぎてしまうだけ。必要な情報は流したでしょ、という話にしかならない。場の

設定が大事。成果が見えてくるとまた集まろうかという流れになる。

助成金情報も、メルマガで情報を流すが、普通はなかなか反応がない。団体の事を普段から気にかけていて、団体に合う情報を個別に伝えてあげると反応がある。コーディネートの部分が必要。

矢島氏：興味深かった。こういう現状を、山口さんが野々村さんに話して欲しかったという思いがよく分かった。このような公的な場で、公式に発言できる場で伝えると、市は無視できなくなる。このような事実関係を作るという場はとても重要な事。非常に重要な会だったと思う。

日頃私が関わっている伝統産業界も同じだが、プロデューサー人材が枯渇している。産地を回って6年位経つが、私が行政からお話しをいただく機会が増えてきているというのも、それだけプロデューサー人材が少ないという現れなのではないかと思う。

それぞれが素晴らしい仕事をされている職人さんはたくさんいるが、そのままだと点で終わってしまう。点と点を結び、それを線にして、面にして見える化して、わかりやすく翻訳して伝えていく人材が必要なのではないだろうか。

プロデューサーを探すという所に注力することも大事だし、今、いないのであれば、どこに、どのような機関の人がなりえるのかについて話し合うことも必要。このような場は、プロデューサー人材と一緒に挑むことが大事であり、そうでないと、この会議の本当の意味のところまで行かず、公的な証言の場に止まってしまうと感じた。

山口氏：「市職員が研修に行けばいいじゃないですか」と、矢島さんに言っていたのは凄くよかった。矢島さんしか言えない言葉であったので、ありがたかった。地域外の方に参加していただく意味を感じた。

プロデューサーという意味では、西村（俊）さんがそういうことをやりたいと思っている。佐子さんも中間支援という立場で。

泉本さんも、市役所内を回って、必要な予算を取って、仕組みを作れる方。そういう行政サイドの仕組みを作れる方と地域の仕組みを作る方の最初の連携の場としては凄くありがたかった。

野々村さんは、現場の人で、味方も一杯作るが、仕組みは作れない。彼女の言葉を翻訳して市役所の中に伝える、もしくは、聞いたことから仕組みに仕上げる人がいないと彼女は成り立たない。

彼女が思いのままに走ってきて、もう限界という所に来た時に手を差し伸べたのが泉本さん。彼が、かなり無理矢理ではあったが、予算を確保して、センターがやっていることをサポートしようと動いてくれたことが凄く大きい。

そういう繋がりを生む場が作りたかった。

遠藤氏：人選が大事で、全体を知らないといけない。

矢島氏：私は、沖野さんに呼んでもらったから来た。沖野さんが呼んでくださるなら、何か意図があると思ったから来た。それで実際、学びがあった、できることがあるなら協力したいと思う。そのような方が自由に動けるようになると良いと思う。

北田氏：地域でやりたい事がある人が、来て欲しい人を呼びやすくするための第1回目の会議にすると面白い。

山口氏：そこからは、あとは自力。

北田氏：自力を集めるために、県の円卓会議からの提案や仕組みで第2回目のきっかけを作るイメージがスムーズかもしれない。

山口氏：表に出ない課題には何かある。一筋縄ではいかない。公の場に出すということの難しさは、行政サイドの現場の担当者の判断にかなりかかってくるところがある。特殊な事情があるという想定はしておいたほうがよい。

今回は挑戦的なテーマであった。今日を迎えるまでは様々な調整を行った。結果的にうまくいった。

西村（勇）氏：次回以降の方向性を出す必要がある。場所は東近江でもう一度やるのか、大津に戻るのか、違う地域に行くのか。またテーマを決めた場合に、どうやって必要な人選や人数、調整を行うのか。

北田氏：やりたい人がいる地域を抽出することはできるのか。

西村（勇）氏：やりたいけど、自分一人ではできないし、声もかけられないし、声だけかけてもらえませんかという人。

沖野氏：地域にもいるが、行政にもキーパーソンがいる。今回は、山口さんだからできた。そういう地域があればできる。県でいうと、流域の関係だとキーパーソンがいるのでできるかもしれない。

慎重に人選しないと、真意が伝わらないともったいないことになる。

西村（勇）氏：ブレインストーミング的に思いついたことを出し合う感じで。

矢島氏：今回は沖野さんが目利き役を担った。目利き人材がどこにいるのか。間違うととんでもないことになる。最初のキーパーソンの目利きが重要。目利きから目利きをたどるという方法が効果的。

沖野氏：京都の100人委員会がそのような形。

谷口氏：今回は山口さんがキーパーソンとなっているが、円卓会議は行政が中心となる

のか。

西村（勇）氏：それを含めて検討する。

北田氏：地域は、スーパー公務員がいないと変わらない。変わる地域にはスーパー公務員がいる。その人に出てきてもらって、その人をサポートする方がやりやすい。NPOの代表が出てきても地域は変わらないので、やる気のあるスーパー公務員を一本釣りするのが面白いのではないか。

沖野氏：県では協働推進員の仕組みなどがそれに当たる。

北田氏：その公務員の方のブレーンとなる人を集め議論してもらい、我々がサポートする方が良いような気がする。

西村（勇）氏：東近江で言うと山口さん、そのような人を発掘しようということか。

矢島氏：スーパー公務員の声掛けで始まるということ。

北田氏：やる気のある公務員を集めてセミナーなんかをやり、来た人の地域でやると面白い。

西村（勇）氏：公務員が集まる網をかけるイメージ。

山口氏：一番来て欲しい人が、来てくれない気がする。公務員の集まりが嫌いという人の方が外の人を知っている。

西村（勇）氏：発掘は、凄く地道。歩いていたら、そういう人に当たったという感じ。そこが面白いところ。

山口氏：話を通じる市職員は、こいつかこいつ、という感じ。杓子定規な返事をしない公務員なのではないか。

沖野氏：凄く元気な地域を紹介してもらおうと、山口さんのような方がいるという可能性はある。

北田氏：スーパー公務員のリストを作るといのはどうか。

山口氏：私は載りたくない（笑）間違いなく、ブラックリスト。

沖野氏：市民側にもいる。行政の側にもいる。その人達を繋ぐ、ハブになる人が必ずいる。

西村（勇）氏：次の地域の件だが、山口さんは東近江で繰り返した方がよいと思われているのかどうか。

山口氏：別の地域でよいと思っている。ここはここでやって行かざるを得ない。違う地域で、種をまいていくようなきっかけを作る方が良いと思う。

沖野氏：地域の中で、防災や林業などのテーマ別すると県が関わる意味がある。

北田氏：テーマを決めて、地域を決める。そして面白い人をフォローする。後追いの仕組みがあると変わってくる。投げてもらったけれど、これで終わったら意味がない。

遠藤氏：人よりもテーマが先と思う。テーマの方が、手が挙げやすい。強く課題だと思う人がいるテーマでないと集まらない。

矢島氏：地域のスーパー公務員がテーマを決め、そのテーマに地域の人が集まるというのが良いのではないか。スーパー公務員が心からやりたいと思っていることでないと誰も集まらない。

沖野氏：深尾さんと相談しながら、来年度の第1回目は6月開催を目途として、作戦会議をしてもよいと考えている。

17：00終了

(以上)